

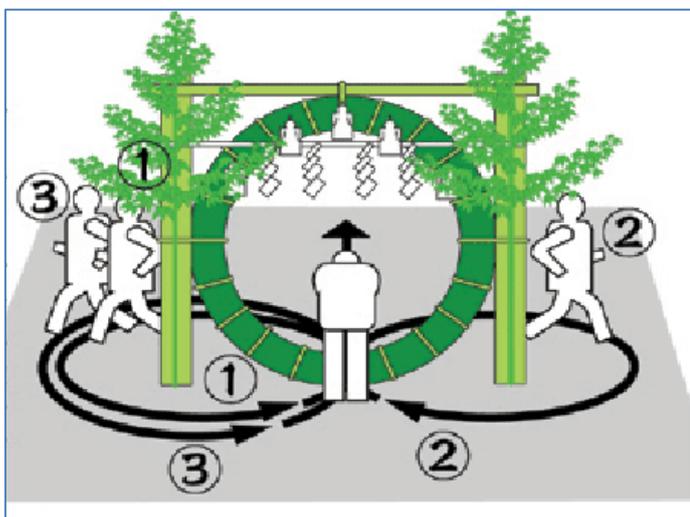
「夏越の大祓い」を終えて

令和元年6月29日 午後3時に今年から恒例行事になりました「夏越の大祓い」が斎行されました。当日は、梅雨時期でもあり、朝から雨が降ったり止んだりと天気がぐずづついていましたのでテントを張ってその準備をしていましたが、午後になりますと雨も止み、多くの参拝者とともに大変厳かで、素晴らし大祓いが出来ました。その由来・作法や当日の写真を掲載いたしましたのでご覧頂きたいと思います。



《夏越の祓いの由来》

一年の前半の最終日にあたる六月の晦日に行われる大祓の神事が「夏越の祓い」。十二月の大晦日に行われる大祓「年越の祓い」とともに、日々の暮らしの中で知らず知らずのうちに犯したであろう罪や過ち、心身の穢れを祓い清め、無病息災を祈ります。



《茅の輪くぐりの作法》

神社では、鳥居の下や拝殿の前などに茅や藁で作った大きな輪を設け、8の字をかくように3回くぐり抜ける「茅の輪(ちのわ)くぐり」を行い、一年の前半の罪や穢れを祓い、残り半年間の無病息災を祈ります。これは「備後国風土記」に見られる、蘇民将来(そみんしょうらい)が「茅の輪」を疫病除けのしるしとした伝承に由来します。古くは腰に着けたり

首にかけていた小さなものでしたが、時代を経て大きくなり、鳥居などに取り付けるものとなったといわれています。また、「茅の輪くぐり」は「8の字」を描くように茅の輪を3回くぐりながら「水無月(みなづき)の夏越(なごし)の祓(はらえ)する人は千歳(ちとせ)の命のぶというなり」と唱えるもの伝えられています。

「8の字」を描くように輪をくぐる



※来年も6月末に齋行致します。どなたでも参加できますので、ぜひお越し下さい。